

R リポート Report

大磯町郷土資料館だより
2012・3・30

32

目次

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 2 | 講演記録 城山荘と祖父三井高棟の思い出 |
| 7 | 「澤田美喜 人生はどんな色にでも塗り替えられるキャンバス」展をふりかえって |
| 8 | 博物館実習生による「古代の大磯の海を知ろう」展／資料の寄贈 |



大磯城山荘にて、孫たちに囲まれる三井高棟
(昭和21年頃／三井文庫提供)

講演記録

大磯町郷土資料館の建つ神奈川県立大磯城山公園の全面開園20周年記念として開催した企画展『三井高棟と吉田茂一城山荘と如庵、七賢堂の記憶』（平成23年1月8日～2月13日）の関連事業として、平成23年2月11日に記念講演会を開催しました。講師は三井総領家10代当主三井八郎右衛門高棟氏の孫にあたる三井保子氏で、高棟氏の生涯、高棟氏や城山荘の思い出などをご講演いただきました。以下は講演内容をまとめたものです。なお、企画展示中の関連資料についても写真を交えて解説されましたが、紙幅の関係で割愛させていただきました。

城山荘と祖父三井高棟の思い出

三 井 保 子

まず最初に、神奈川県立大磯城山公園全面開園20周年おめでとうございます。神奈川県、そして大磯町の皆様のご努力によって、今日があると思っております。祖父三井八郎右衛門高棟は、本当にこの大磯の町を愛していました。大磯に別邸を作りまして、敷地をだんだん増やしていくわけですけれども、その敷地を神奈川県立公園として保存していただいて本当に喜んでいると思っています。

本邸は東京の今井町にございました。別邸は城山荘のほかに箱根や拝島にもありました。三井の迎賓館としては、当時鹿鳴館を設計されたジョサイア・コンドルさんにお願いしまして、三田の綱町に作り、「三井の迎賓館」と呼んでいました。西洋建築で、本館につながる庭園も純英國式でした。高棟は本当に建築や築庭が好きでした。大磯の城山荘というのは、奈良や京都では東大寺、薬師寺、三千院、そして東京では浅草寺などの古材を使って建物を作りました。新しいもので建てた方が、よっぽど簡単にできると思いますが、いろいろな想いがあってそうしたのだと思います。城山荘ができた当時は、古材館誕生というようなタイトルで記事が出たりしました。大磯町郷土資料館も城山荘をモチーフとしてお作になりましたと聞いております。その建物の模型がロビーにありますのでぜひご覧いただきたいと思います。

先程もご紹介いただきましたが、私の母、三井祥子（さきこ）は高棟の末娘でした。祖父高棟と祖母苞子（もとこ）には二男五女おりまして、母は五女でした。以前、大磯町郷土資料館で「城山荘と城山窯」という企画がありました。そのときにも母はお手伝いをさせてい

ただいたようです。そんなご縁もありまして、今日こうやって皆様の前でお話をさせていただくことになりました。

城山荘と高棟のことをお話する前に、まず三井家についてご紹介しておきたいと思います。

三井家は、三井越後守高安（たかやす）が商いを始めます。武士であった高安は遠祖といわれています。高安の孫にあたるのが三井高利（たかとし）です。三井家は家督を相続する上で、長男、次男には「高」という字をつけています。高利は非常に商才のある人で、伊勢の松阪で金融業を営みます。一方、江戸で越後屋八郎右衛門という呉服屋を創設します。これは現在の日本橋三越ですね。非常に三井を大きくしたので家祖と呼ばれています。

また、三井家は十一家あります。総領家を含む六本家と、そして五つの連家、この本家は三井高利の直系の男子家系、五連家は娘婿を含む養子の家系です。姓はすべて三井です。ですから三井さんと言っても收拾がつかないものですから、三井家の中では京都とか東京の居住地の名称で呼び合っております。

総領家は北さんと言われています。何で北と言われているかというと、かつて京都に住んでいたことがあります。今の京都国際ホテルの敷地ですけれども、そこに住んでおりました。そして、すぐ南にも三井がありました。ですから、総領家を北さんと言い、もうひとつを南さんと言っておりました。他に、伊皿子（いさらご）家、これは東京に伊皿子という地名がありますけれども、そこに住んでいたためです。小石川家、これも東京の小石川

です。新町家、室町家、これは京都の地名です。五連家は五丁目、本村町、一本松、松坂、永坂です。日本橋の三井本館にある三井記念美術館には、展示物に北三井家とか、室町三井家という表示があります。それは今申し上げた呼び名から来ているわけです。

三井高棟は三井家の同族会の議長でした。そして三井合名会社の社長、これは三井家事業の最高統括機関です。そして、高棟は総領家の第十代にあたります。第八代が高棟の父に当たる高福（たかよし）です。「こうふく」さんという言い方もしていました。九代は高福の長男の高朗（たかあき）という人が繼ぎます。ただ高朗には子供がいなかったのです。高棟は八男ですが抜擢されて十代を繼ぎます。高棟は京都で生まれ、幼名は五十之助（いそのすけ）と言います。六歳のときに高朗の養子になることが決まり、名前を変え、長四郎となります。この長四郎は北家の相続人が一時名乗る名前です。11歳になりますと、今度は高棟という名前と花押が決まります。花押とは草書体をデザイン化したような署名です。そして、29歳で家督を相続し、八郎右衛門という名前を襲名します。八郎右衛門の名前は、もともと江戸や京都の呉服店の店名前ですが、後には三井一族を代表する意味を持つようになります。途中、総領家以外が継いだ時もありますが、八代の高福以後は総領家が継ぐようになります。

次に大磯“城山荘”での高棟の暮らしについてお話をしたいと思います。

城山荘は明治22年から27年ごろ、高棟が別荘地のひとつとして、大磯に土地を購入します。それは当時皇太子の主治医であった橋本軍医総監から、大磯は気候温暖で、とても健康にいいからと勧められていたことが大きな理由です。明治31年に城山荘の建物を新築すると、後の正天皇となられる皇太子が立ち寄られたことから、建物のひとつを降鶴堂（こうかくどう）と命名します。母たちは、その堂の前を通るときは、いちいちお辞儀をして通るなど大変だったと言っていました。

やがて、土地を増やしていき、昭和10年には敷地面積が、約3万8000坪、これは東京ドームの2.7倍です。しかし、大正12年関東大震災でその建物は損壊してしまいます。そのために、今度は地震に強い建物を作ろうとい



(行燈屋敷) 荘別家井三の丸中 (景風園大)

明治31年に建てられた降鶴堂（大磯町郷土資料館蔵）

うことで、設計を久米権九郎さんという方に依頼します。久米さんはドイツで耐震建築を学びました。この方は高棟の子である第十一代八郎右衛門高公（たかきみ）のクラスメートのご兄弟に当たります。そんな関係もあって、そしてとても優秀だということで、若手ではありましたが建築設計をお願いしたようです。そして、高棟が陣頭指揮をとりました。お任せで建物や庭を作るのではなく、自分の意見を入れながら作っていただいたようです。昭和10年10月に完成披露をしています。また、昭和12年から16年にかけては、国宝の如庵の移築が行われています。

三井家では、京都、東京今井町本邸、そしてここ城山荘の別邸でも、“表（おもて）”の方により日誌がつけられています。“表”というのは男性の事務方のことをいいます。ちなみに女性は“お次（つぎ）”といいました。「城山荘日記」には、日付、曜日、天候、宿直でその日の記載者名、気温を一日三回、午前7時と正午と午後6時に計測しています。次に高棟たちの主な行動、そして、お客様にどなたがいらしたかなどが記されています。

明治44年頃の「城山荘日記」では、毎月の別邸の手入れのため、庭の掃除の様子が書かれています。また、春休みや夏休みのような長期休暇に高棟の子どもたちが滞在したことでも記載されています。昭和7年には、城山荘改築の設計打ち合わせのため、久米権九郎さんがいらしています。

高棟は建築現場を巡回して、古材の使用についていろいろ指図をしていたようです。翌年、有名なドイツの建築家ブルーノ・タウトご夫妻がいらしています。案内人

は久米権九郎さんです。ブルーノ・タウト氏は、箱根の別邸もご覧になりたいということで、翌日箱根にいらっしゃいます。

ブルーノ・タウトご夫妻をお招きするため、高棟は東京の今井町本邸から、車で2時間かけて城山荘に来るわけですが、ここで大磯の方々の温かいお気持ちに触れます。城山荘の居間では、次の方々が迎えて下さった記録があります。

大磯署署長小野寺様、同大磯署高等係柴田様、大磯署巡查大田様、中丸駐在巡查北堀様、中丸区長吉川様、村委会員近藤様・原田様、中丸村青年吉川様・原田様、消防組頭山口様。“中丸”というのは、皆様ご承知のように、当時のこの地域の名称でした。母から祖母宛の手紙の表書きに、「神奈川県 二ノ宮 字中丸 三井苞子様」と書かれていました。この方たちは居間に来てくださったのですが、門内でお出迎えの方もいらして、薪・炭を扱う方、雑貨、植木、魚、青物を扱う方々、大工、石工の皆様方が迎えて下さっています。こうした皆様方の心からの温かいお出迎えが、高棟に次第にこの地を終の棲家とする気持ちにさせたのではないかと思われます。

昭和10年1月には、永楽善五郎さんが「城山窯」開設準備のため滞在なさっています。同じ年、東京本邸より、石燈籠6基や、さまざまな物が貨物自動車で運び込まれます。10月初めには、スプーン、フォーク、ナフキンの見本が届きます。

10月8日、「城山荘 改築」が竣工します。そして、



改築された城山荘本館（大磯町郷土資料館蔵）

何度かに分けて娘達夫妻と嫁ぎ先の方たち、会社重役の方々、設計者久米権九郎様、そして、古材調達に特にご尽力いただいた薬師寺さんと喜光寺さん等をご招待しています。

城山荘には農園もありました。昭和13年頃から度々、城山荘の農園で、胡瓜、苺、西瓜、柿などが収穫され、それらを子供達に送っています。昭和15年8月の日記には、

「祥子様、西瓜のお礼状到着す」

とありました。お礼状を書かなかったら、たいへんな事になっていましたね。もっとも母は、本当にお礼をきちんとお伝えする事は見事に実践していました。お友達とお会いして帰ってくると、先ず一番にお礼の電話をかけていましたし、ホテルのレストランで食事をして戻ると、マネージャーにお礼の電話をすぐにします。やはり自然と身についていたのでしょうね。もっとも、両親との和んだ Skinner は、別邸滞在の時ぐらいだったようです。普段は其々お付がいて、日常の事はその方たちが見てくださっていたわけですから。出かけるときの「行って参ります」の挨拶や、夕食時は両親と一緒にしたけれど、両親と会うのはその程度でした。母はよく箱根の別邸で、夕方祖父と腕を組んでお散歩をして、母が祖父のステッキがわりになった事や、祖母とトランプをした事を楽しそうに話していました。

次に私がちょっと驚いたのは、昭和20年の戦争関連の記述です。5月24日は、東京に空襲があっても各家無事だったことが報告されていますが、5月25日には、今井町本邸、新館共に全焼、お蔵だけが損傷を免れたと報告されています。そして、そんな事があってからも、5月28日に祖父母は降鶴堂で記念茶碗の区分を指図し、5月29日に高棟は金婚式の御祝記念のお茶碗を作っています。戦争というものは、皆に明日、自分の家が全焼してしまうかもしれないという覚悟を持たせるのか、あるいは、ある意味で日本経済を牽引してきた高棟にとっては、家1軒よりももっと重要な何かを考えていたのか…。あまり動じていない冷静な祖父に、私はびっくりいたしました。

戦争が終わって9月15日に、大磯でちょっとしたハプ

ニングがありました。マッカーサー司令部所属のアメリカ将校がいきなり城山荘を訪れ、ビールを要求する事件がありました。最初に玄関に出た男の人たちを撮影し、それからピストルを突き付けて玄関の門扉に迫り、ビールを要求したようです。ビールと日本酒を与えると、礼を述べて、また明日来ると言い残して帰っていました。また来られたら困りますので、早速大磯署に届けています。大磯署からそういうことがあったら、すぐに通訳と一緒に馳せ参じますという確約を得てほっとしています。

10月23日には、アメリカ進駐軍平塚駐屯陸軍少佐ほか1名が、通訳を連れてきます。そして、ラジオセットの譲渡を申し入れます。古いものがあったのでそれを一台贈与すると、彼等は感謝して退荘しました。

昭和20年12月31日、高棟とお次一同との大晦日の挨拶の中で、高棟は

「本年ハ誅ニ悪い年（戦争敗レタル事等）
デアッタガ 此等ノ悪い事ハ 勢ヨク
吹祓ッテ来年ハ良イ年ヲ迎ヘヨウトノ
御言葉有之」

と述べています。「勢いよく吹きはらって」という言葉がいいですね、前向きで。心が弾むというか、そういういたバネを持っていないと。そういうのがきっと力になっていたのでしょう。

この「城山荘日記」の記載に“お二方様”という表現に象徴されるように、高棟は祖母・苞子を大切に想い城山荘で暮らして参りました。ところが、祖母が亡くなるという事態が起きてしまいます。そして、気落ちした高棟を気遣って、母・祥子は私たちを連れて城山荘の長松軒（ちょうしょうけん）に長期滞在します。長松軒は、祖父の住まいの本館とは廊下続きでした。

昭和21年3月31日、当時外務大臣だった吉田茂様が“お庭拝見のため”来荘なさいます。

祖父は、毎日のように邸内のお堂を巡り、読経、参詣をします。その際、最年少の孫である私を連れ歩いたので、「城山荘日記」には、「保子様ご同伴」の文字が頻繁に記されています。



大礼服姿の高棟（大磯町郷土資料館蔵）

7月のある日の「城山荘日記」を見ると、午前七時華氏七十九度（摂氏26.1度）、正午八十四度（28.9度）、午後六時八十六度（30度）、

「高棟様ニハ午前九時三十分お出マシ被遊
保子様御同伴ニテ法雲堂へ御越ヒ遊」

この後、法雲堂（ほううんどう）で金光院（京都・金光院義光尼）外一同にて読経参詣、次に等持閣（とうじかく）、六窓堂（りくそうどう）を経て、大雄殿（だいゆうでん）にて歴代天皇に拝礼、摩利支天（まりしてん）に拝礼、次に三井家ご先祖代々様の御靈に拝礼、少憩の後、洗心寮（せんしんりょう）、四阿廠（あずまや）を経て、

「十一時二十分御入りヒ遊」

とあります。9時30分から11時20分ですから、ほぼ2時間コースですね。この2時間にわたる“お参り”は、大磯での主治医・曾根田恭男氏から下記のような提案がなされるまで続きました。

「高棟様拝診（健康診断）申上ゲタル処
別段御異状ヲ拝セズ 只 坂道ナドノ
御運動ハ少々控目ニ遊バス様トノ事」

この曾根田医師の曾孫様にあたる方が、資料館に勤務されていると先程うかがいました。お目にかかるとても嬉しかったです。そして、2時間コースから1時間の短縮コースも組み入れられました。短縮コースは大雄殿のお参りを、金光院様に代参をお願いしました。

また、夕食後（午後6時30分～7時30分）、お仏間で

読経しながら金光院様を中心に“お念佛百万遍”を唱えます。“お念佛百万遍”って、どんな事かご存知の方はいらっしゃいますか？私も分からなかったので、姉に聞いたところ、皆で大きな一つの数珠の一粒ずつを右に廻しながらお念佛を唱えたそうです。大きな数珠の中央に金光院様がいらしたようです。

また、面白い習慣の記述も発見いたしました。

12月8日、「本日ハ釈迦如来が修行重ネテ悟ヲ開イテ帰ラレタ日に當り、こんにゃくと大根、味噌煮ヲ食スル日ナル旨 金光院ヨリお話有之 早速 夕食ニこんにゃくと大根の味噌煮を召上ラル この食物ハ二枚舌ヲ使ワヌ戒メ由」

「こんにゃくと大根の味噌煮」と「二枚舌」の関連性がよく分からぬのですけれど…。

祖母のお琴が、祖父から母に贈進された記述もありました。後程、皆様にお見せるスライドのお琴の爪や琴柱は、この時のものかもしれません。

大磯町の伝統行事「左義長祭」「ドンド焼」の記述もあります。1月15日、お細工場前広場で左義長祭りやドンド焼を見ています。「ドンド焼」は、正月用注連飾り、門松などを燃やし、お団子を焼いたようですね。城山荘では、細工場前（窯場前）の広場で、お餅を梅の枝に付けて焼き、お餅が垂れるようになると、それを持ち帰り食べたようです。

また、三井家ではお誕生日を大切に考え、皆に御祝膳が振舞われたようです。お誕生日だとその人がいなくてもご馳走を食べました。私の誕生日のときも、祖父から物が送られてまいりましたけれども、それは食べ物なのです。食べ物でみんなで祝うという意味になるのでしょうか。

祖父の心配りの細やかさを表す記述に、祖父が直接、私たちの滞在していた「長松軒」に出向き、お風呂場の位置など種々指図したとあります。

5月14日の日記では、なかなか1時間コースも大変になってくると、高棟はお仏間にて、法雲堂、大雄殿を遙拝、回向し、降鶴堂の庭先で日光浴をし、昼食もそこで楽しめます。そんな時、私も一緒にいただいたようです。

祖母は亡くなつてからは慈恩院（じおんいん）という名前ですが、命日にはお逮夜御法要というのがございま

した。毎月、法要は東京・真盛寺岩田教順師を招き、京都・金光院義光尼のお勤めで読経が開始されます。

「高棟様御焼香 続テ保子様 次に会社代表」という記述を見て、今更ながら、小さい私が皆様にご迷惑をかけずに雰囲気も損なうことなくお焼香ができたのか心配になって参ります。

こうして平穏な日々が続いますが、8月31日、私たちは東京に引き移る事になります。祖父はやはり寂しさを感じたようでした。このため、私は城山荘によくお泊りに来ていたようです。初回は、母とお供の方と3人で来て、母は翌日東京に戻り、私達はそのまま滞在します。お供として私に付き添っていた方も、祖母のお付の娘でしたので、城山荘で母娘の語らいのひとときを持てたと思いますので良かったのではないかと思います。

麻布今井町の本邸、大磯別邸・城山荘、箱根別邸、拝島別邸のそれぞれの庭園、そして綱町別邸の日本庭園は、茶道家であり、築庭に優れた薮内節庵氏と高棟の緊密なる意見交換のもと、高棟自らも情熱を注ぎ築庭作業がすすめられました。しかし、城山荘の庭園は、他の庭園と決定的に違う点があるよう思われます。それは、高棟がここで、自分のユートピアを築こうとしていたのではないかという点です。母が、“おじじちゃん（=高棟）は、もっと城山荘に建物を建てたいとおっしゃっていたのよ”という言葉からも、この広い敷地の中に、好きなように建物を建て、それに見合った門をつけ、更にその近辺の景色を整えていくという楽しみを実現してきて、更にもっと別の構想に着手したかったのではないかでしょうか。国宝・如庵と共に存できる建造物を建てられたのは、この大磯の地以外にありません。多少昔と違っていても、この「神奈川県立大磯城山公園」を散策することにより、祖父の踏み固めた“石”に出会うかもしれません。この大磯のおおらかな、それでいて繊細で気品のあるこの土地を、いつも大切に想っていきたいと思います。ありがとうございました。

（日本スロヴァキア文化交流会理事／三井高棟孫）

秋季企画展「澤田美喜一人生はどんな色にでも塗り替えられるキャンバスー」をふりかえって

昨年10月22日から12月11日まで、秋季企画展「澤田美喜一人生はどんな色にでも塗り替えられるキャンバスー」を開催しました。澤田美喜は、第二次世界大戦後、進駐軍兵士と日本人女性との間に生まれ、孤児となった子どもたちを救うため、私財を投げ打って児童養護施設「エリザベス・サンダース・ホーム」を創立した方です。開催期間中の入場者は6,726人を数え、関心の高さを実感しました。

当館は、昭和63年の開館以来、大磯の地域的特色を活かすような企画に腐心してきましたが、近年になって人物展示を恒例として開催しています。大磯という地域的特色を際立たせ、他地域と差別化するためには、大磯に拠点を構えた多くの歴史的人物や特徴ある人物の発掘が有効であるとの認識からです。平成19年度には松本順（「大磯の蘭疇」）、平成21年度には伊藤博文（「滄浪閣の時代」）、永山光幹（「研師 人間国宝永山光幹」）、平成22年度には三井高棟・吉田茂（「三井高棟と吉田茂」）を開催し、いずれも話題性を提起してきました。澤田美喜展も、そうした流れの中から企画されたものです。

しかし、澤田美喜展の企画には若干の迷いがありました。何よりもエリザベス・サンダース・ホームが現存しており、澤田美喜さんの心に触れることのできる記念館という公開施設もあります。そのような状況の中、大磯町内の別の場所で展示会を開くことに十分な意義を見出すことができるのか。また、没後30年を経過したとはいえ、生前の澤田美喜さんをご存知の方々は少なくありません。展示担当者の取上げ方によって、実像と乖離（かいり）してしまわないかという心配もあります。企画は慎重にならざるを得ませんでした。そのような折、平成20年に鳥取県立公文書館で特別展「澤田廉三と美喜の時代」が開催されたこともあり、澤田美喜さんを展示してほしいという声が多く寄せられ、当館としても展示開催の好機であると考えました。

今回の展示では、2人の若い女性学芸員を担当に据えました。澤田美喜さんが生きた時代を知らない世代です。生前の澤田美喜さんを知る方々が健在でおられる半面、名前さえも知らないという世代が増えていることも事実



です。そこで、あえて若い同性の眼に澤田美喜さんがどのように映るのかということからアプローチが始まりました。そして、彼女たちは、澤田美喜さんの生き方を「グローバルな視点」「生命尊厳の哲学」「平和創造の行動力」という3つの視点に整理しました。澤田美喜さんの足跡や実績を知る手掛かりとしては理解しやすいキーワードであったと思います。しかし、一方でその視点は教科書的であったかもしれません。というのも、来館者の声やアンケートの中で、いくつかのご意見に教訓を受けました。すなわち、「ホームの子供達からの視点が少ない」「施設を卒業したたくさんの方々から、どのような評価や気持ちが伝えられているのか」という内容でした。このことは、単に顕彰するだけでは収まりきれない生身（なまみ）の澤田美喜さんを知るには、そこで働いていた方々や子どもたちの声にこそ、真実が隠されているのではなかったのかという問題提起であり、あらためて人物展示の難しさを感じました。

昨年3月、本格的な企画準備を始めようとした矢先に東日本大震災が起きました。被害の悲惨さと甚大さに言葉を失い、追悼と復興の中で世間全体が自肅ムードとなり、本企画も勢いを失いかけた時期もありました。しかし、何とか開催にこぎつけたのは、どんな困難にもめげず、勇敢に信念を貫き通した澤田美喜さんの力強い生き方が背中を押してくれたのかも知れません。

最後になりましたが、本展示に際してご協力を賜わりました、ご遺族、関係者、関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。

（当館館長・学芸員／佐川和裕）

平成23年度博物館実習生による 「古代の大磯の海を知ろう」展

当館では、毎年、博物館学芸員資格取得を目指す実習生を受け入れており、実習の一環として常設展示室の一部コーナーを使って、実習生自らが企画から完成までを実践する展示替実習を行っています。

本年度は「古代の大磯の海を知ろう」という、大磯の自然をテーマとして、大磯町内の化石産出場所や採取した貝化石などを紹介しています。大磯町内において化石が産出される「大磯層」と「二宮層」と呼ばれる地層の特徴や、実際の貝化石の紹介など、手作りのジオラマ模



【平成23年度博物館実習生】

型とともに分かりやすく展示を工夫しています。平成24年8月末まで展示をしていますので、ぜひご覧ください。

資料の寄贈（平成20年11月～平成21年12月）

地区	受入先	資料名
大 磯	光野恒雄 氏	真空管ラジオ
	飯田善雄 氏	絵はがき 他
	仲川三郎 氏	東京五輪トーチホルダー
	黒江初江 氏	衣服 他
	菊池なつみ 氏	表札（島崎春樹）
	岩田 勇 氏	脇差
	木村純子 氏	衣服 他
	飯田福信 氏	書籍
	宮代治吉 氏	古写真
	二見光道 氏	書籍
	小林佳代子 氏	古写真 他
	大磯町観光協会	記念乗車券 他
東 小 磯	新見由美子 氏	鯨尺 他
	石井清吾 氏	明治期新聞 他

地区	受入先	資料名
東小磯	後藤克彦 氏	蜂の巣
西 小 磯	谷久保清一郎氏	木鉢 他
	小沢清水 氏	衣服
	岩井喜久枝 氏	コガタスズメバチ初期巣
国府本郷	柳田照代 氏	神棚 他
	添田公一 氏	竿秤
	吉川好敏 氏	コビキノコ 他
二宮町	原田優人 氏	千人針 他
	西山敏夫 氏	ウナイグワ 他
平塚市	露木スエ 氏	絵はがき
伊勢原市	二挺木恵 氏	古写真 他
厚木市	高木東一 氏	書籍
東京都	和田清治 氏	古文書 他

ご協力ありがとうございました。

【表紙写真】

三井総領家10代当主三井八郎右衛門高棟は、昭和8年に家督を嫡子・高公に譲ると、大磯城山荘を終の棲家と決め、改築にとりかかります。全国の古社寺の古材を再利用した本館は、物を粗末にしないという高棟の信念が息づいた建物となりました。写真は昭和21年頃に本館前庭で撮影されたものです。前列中央に高棟が座り、総勢20人の孫たちに囲まれています。好々爺とした高棟が印象的です。

（『三井八郎右衛門高棟伝』より 三井文庫提供）

Report - 大磯町郷土資料館だより - No.32
平成24(2012)年3月30日発行

編集・発行 大磯町郷土資料館
〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1
TEL.0463(61)4700/FAX.0463(61)4660